

特集 ボランティア記念座談会 (2008年8月9日午後1～4時)
名古屋市美術館・応接室

ボランティア活動開始から10年、開館20年とダブルの節目を迎えたのを機に、座談会を開催しました。
出席者：神谷副館長／服部総務課長／山盛学芸主査／ボランティアの方9名
司会：山田学芸係長

司会(山田学芸係長)：ボランティア記念座談会にご出席ありがとうございます。今日は、これまでの活動を振り返りながら、その面白さや楽しさについて話し合っていたきたいと思っています。緊張なさらず、**ざっくばらんに**、お話ください。それでは最初に、ボランティアの立ち上げを準備した担当であった二人から、ボランティアの考え方や準備での苦労話などをお聞きたいと思います。

神谷副館長：私は、人事異動で博物館から美術館へ来て、いきなりボランティア担当になりました。そのときには、ガイド活動を中心にするなどなどの基本的な考え方はすでに確定していて、また上滑りな解説だけのガイドにしないことやボランティアのなかで格差ができないようにすることなどに気を配りながら、いつ活動を開始するか、活動費や控室のことなどの具体的な計画を確定する段階にありました。1999年4月の開始を予定していたのですが、**半年前倒し**をして、開館10周年記念のピカソ展に併せてということで、1998年3月に募集、4月から研修を行って、10月にスタートしました。

服部総務課長：私は1997年4月からボランティア活動の立ち上げに携わりましたが、1998年3月に異動したので、募集までしか知

りません。当時、担当学芸員が活動プログラムや研修内容などについて検討していましたので、私は制度的なことなどを担当しました。

司会：募集方法などで工夫したことはありますか。どのような人に応募してもらいたいと希望していたのですか。

神谷副館長：募集方法については、いろいろな美術館を参考にして決めました。美術館の最前線に立って活動してもらうためには、**知識だけでは駄目**で、来館者を大事にしてくれる人、美術館のことを思ってくれる人、向上心のある人といった観点で見えていました。もちろん特技とかで、福祉関係の技術や語学などがあれば役に立つとは思っていましたが、基本的には、**意欲と人柄**を論文や面接で見えていました。面接には、いまでも面白い人が来ますけれども(笑)、1期のときには、ボクサーの方が来て、ファイティング・ポーズをとりながら「作品を守ります」と言っていました(笑)。

司会：これに対して、それぞれの皆さんが最初に募集のことを知って、応募用紙に名前を書いて、応募したときの気持ちを振り返って、お話いただきたいのですが。

OCMさん：私は、その頃、何か違うことをやりたいと思って、ふと家に置いてあった『広

報なごや』を見たら募集記事があったんです。普段は見もしないのに、**縁があったのか**、その文面だけが目に入ってきて小論文なんか書いたことはなかったけれど、とにかく自分の思いを書いたら、面接まで行き着的といった感じですね。

KBMさん：私は、旅行したときに美術館を訪ねるのが趣味だったのですが、一人で行った時、「いいね～素敵よね～」と話し合える相手がいれば、もっといいだろうなと、いつも思っていたんです。そんな時に、名古屋市美術館でボランティアをしているという1期の方に出会って、私も即「やりたい!」と。「ただし今度の募集は**2年後**よ」と言われて。

司会：2年待って応募されたのですか(笑)。



カー口 《死の仮面を被った少女》

アートの旅「過去・現在・未来」

(彫刻家・名古屋市美術館参与)
石黒 鏑二

風景の中で その3 主張をやめたモニュメント

摩天楼が林立するアメリカのイリノイ州シカゴは、アレクサンダー・カルダーをはじめパブロ・ピカソ、オルデンバーク、ハリー・ベルトリアなどの巨大彫刻群の競演で有名である。この様な物量のみならず、常に自らの存在を主張することで環境化を計ろうとするのが、一般的モニュメントの概念であり、ごく普通の姿と言える。

ところがわれわれは、最初からそれらへの関心も興味もなく、むしろそれらを積極的に放棄したとしか思われないモニュメントに出会い戸惑うことがある。ドイツの彫刻家ウルリッヒ・ルックリウム作品は、その代表の一例であろう。

私がはじめて彼の作品を目にしたのは、1993年スペインのバルセロナのゴビエルノ市民宮殿前であった。フランシア駅で、プロバンス経由ヴェニスに向かう友人たちを見送った後、地下鉄の駅を探していて偶然にも、その彼の白花崗岩による作品に出会った。

そこには、全く無表情な単なる三角形を

した石が、それぞれ二個づつ一対で四個並んでいた。高さ二メートルほどの二つの長方形の石を、それぞれ斜めに二つに割り、四個となった三角形の石を左右対称に行儀よく並べている。

どうしたわけか、その周辺だけ薄暗いせいもあり、一緒にいた連れの友人など、それが彫刻とは気づく風もなく通り過ぎようとした。何を語るでもない無表情な白っぽい大きな石塊は、単なる資材かせいぜい門柱ぐらいにしか見えないのだ。

彼の作品には、ミュンスターやフランクフルトやメンヒェン・グラートバッハなど、ドイツ各地で多く出会うことができる。しかし、そのほとんどは原石そのままの形であり、それが作品であると気づくのはかなり困難である。まだこのバルセロナの場合は、三角形という人工的な形をしていて親切であった。

彼の作品の多くは石材である。彼は原石を与えられると、それを丹念に二つに割っていくところから仕事をはじめ。二つに割られたそれぞれを、さらに二つに割るのである。それが彼の前半の作業である。そして後半は、その割られた石の一つひとつを一欠けらも残さずくっつけ元通りの原石に戻すのである。その内臓された作業はほとんど分からない。われわれは、この徒労とも言える行為に何を読み取ればいいのか。

時の話題

8月のはじめ、美術に関するニュースがマスコミに相次いで取り上げられた。ゴッホの油絵作品の下に別の絵が隠されているということ、写楽の作品がギリシャで発見されたということ。どちらも大変興味をそそられる。写楽と言えば、10ヶ月の活動時期しか知られず、素性も、活動を停止してからの動向もほとんどわからない。短期間に140枚ほどの作品を残し、役者の顔の特徴を強調して描い

見ても、緊張感にあふれた真正な作という印象を強く持った。写楽については、役者の本質をとらえることには抜群に優れた感覚を持つものの、表現する技術はそれほどではなかったと思っていたが、この肉筆画では、かなりの手腕であったことが見て取れる。大変しっかりした描写力を持っていたのである。

発見された場所がギリシャであり、こんな所に浮世絵コレクションがあったのかと、思う人も多いであろうが、実はヨーロッパでは、ちょっとした美術館には必ず浮世絵のコレクションが存在している。しかも、調査団が入るほどの量があるのだ。

美術界にはわかっていないことはまだまだ多い。持っている知識だけで判断をしてはいけないと思い知らされる。こうした新発見は、時として従来の評価を変えてしまう可能性だってある。ゴッホの完成作の下にどんな作品が隠されているのか。相当な数の作品が隠されているという。想像してみると面白い。ゴッホが塗りつぶしても仕方がない判断した作品である。残された作品と塗り込められた作品の比較をすると、ゴッホの自作に対する審美眼あるいは判断基準がわかってくるかもしれない。気になる作家の気になる事柄が判明する可能性だってあるのだ。(hkh)

OCMさん：だから軽い気持ちで話したのに。
司会：こちらも軽い気持ちなんですけどね。
KBMさん：私だって訊きたいですよ〜、インタビュアーだったら。
OCMさん：「どこがどのようにと訊かれましても、どのように答えていいのか、わかりません」と答えたのを覚えています。
SBHさん：**白旗揚げ**ちゃったんですね(笑)。
神谷副館長：いまもガイドしていて、「どこがいんですか」と訊かれるでしょう。
OAKさん：好きな作家がいると、名前を挙げるだけじゃなくて、必ず「どこが好きですか」と訊かれたんじゃないですか。
司会：まあ、面接の話はこれくらいにして(笑)。
KCKさん：私も区役所で、明日か明後日が締切というときに応募用紙を見つけて。美術館に行くことが大好きで、お友だちと一緒に、いろいろな所に行っていたのですけれど、少し説明してもらおうと楽しいなという気持ちがあったので、募集を見たときに、「私にぴったり」と勝手に思って(笑)。そういえば名古屋市美術館には、ガイドさんがいたなと。いま思うと、1期の方なんです。年輩の女性が絵の前で「**これ、いいでしょう**」(笑)と、行く作品、行く作品の前で、「いいでしょう」を繰り返されて、でも、私、そのとき本当にいいと思ったんです。こんな感じなら、私にもできるかなって。
YDYさん：私は主婦で、美術も美術館巡りも好きだったのですけれど、その頃は子どもも大きくなって、それまではPTAとかをやっていたのですけれども、社会との接点がなくなるような時期になっていたこともあって、ボランティアを「やりたいな」と思いながら暮らしていたんです。そんなときにセンチュリー・ホールでコンサートがあって、そこで応募用紙を見つけました。実は3期のときにも応募して、活動日が限られていたせいか、落ちたんですけれど、たまたま行ったコンサートで、また応募用紙を見つけて、**やっぱり応募しよう**と思って、出したら、幸運なことに受かって、論文を書くのも何十年となくて、面接を受けるのも初めてでドキドキで、採用通知をもらったときは嬉しかったです。
KEMさん：私は、どこで知ったのか、思い出せないのですけれど、子育てがちょっと一段落した頃に、美術館巡りを楽しんでいたんですね。一人で行くのが好きで、作品の前で何か共感できるものがあったら、ぼうっと立って見ているというか、それで癒されて落ち着いて、元気がもらえるということを、何となく感じていました。それから、絵から離れて、他のことをやっていたときに、人と関わることの楽しさを体験したので、それなら自分の好きな絵を見ることで、いろいろな人と「よろこびをわかちあう」ことをやりたいなと思えたときに、応募用紙が目に入ってきたんですね。それで応募して、なぜか**「絶対受かる」**という自信があったんですね(騒然)。いえいえ、論文とか駄目でしたよ。でも、何か気持ちがもうそこに行っているような感じで(笑)。実際に研修をはじめると、皆さんすごく知識があるし、他の期の方と一緒に活動に入ると、皆さんすごくうまいし、一時期、辞めようかしらと思ったこともあったのですけれども、1期の方のように10年掛けて築いているのを見て、私も10年くらいを目安に頑張ろうと(笑)。
司会：10年とは言わずに、もっと(笑)。
OAKさん：私、1期なんです。先生をしていましたので、これが天職みたいです。人前で話するのは好きだし、絵は好きだし、美術に囲まれる所に行けるなんて、「幸せだなあ」と思って、応募用紙を見た瞬間に、もう**「私はこれだ」**と、ちょうど時期が定年でぴったりでした。ただ講師を延長でやってほしいという話もあって、活動可能日がはっきりするまで待っていたら、3月31日、ぎりぎり最後の応募だったと思います。はい、10年、幸せにやらせていただきました。
SBHさん：僕の場合は、もともと協力会に入っていて、ボランティアのことは聞いていたのですが、あまり関心がなかったんです。でも、ガイドを聞くのは好きで、いろいろな美術館で体験していました。そのなかに台本を読んでいるようなガイドがあって、もし、こんなスタイルで名古屋市美術館がガイドをするのなら、**「僕は応募しない」**と思っていました。1期の人たちがガイドをはじめたとき、どんな風かなと見ていたら、自由に思ったことを、知識を伝えるのではなく、絵を見る楽しさとか、ここを見ると面白いよと気付かせてくれるような話し方だったので、これだったら参加できそうだなと思って、応募しました。
司会：こうして皆さんは、半年間の厳しい研修を

受けることになったんですけれど、この研修について、何か思い出があれば。
YEYさん：5期の人たちと話していたことですが、課題が返ってきたときに、添削というか、**赤ペンだらけ**で、「こんなことでどうするの、見ている所が違うのよ」というようなことが書いてあって、それがかなり厳しくて、「もう辞めようか」と思ったときもありました。
KBMさん：私たちのときは、そこまでやってもらえませんでしたよ。
OAKさん：何度もレポートは出しました。作品についての印象や感想を書いて。
KCKさん：でも、そんなに「赤ペンだらけ」というような覚えはありません。
KBMさん：皆さんの様子を見て、私たちは少々**「羨ましいな、」**と思っていました。先ほども言いましたけれど「赤ペン添削経験」がなかったですから。
YEYさん：4期の頃からですよ。そこまで厳しくなかったかもしれないけれど、添削されて戻ってきて、毎週宿題がありました。**解説型から対話型**を重視する方向へ転換する時期だったので。
司会：3期以前と4期以降では、研修の内容が少し違っています。4期以降は、「知識や思い込みで見たりしないで、ともかく作品を観察してください」ということから始めていますので、そういう意味では、「描いてあるものではなくて、頭のなかにあるもので説明しては駄目です」という指摘をしたことは多いと思います。
KEMさん：実際にやってみると、それだけではうまくいかなくて、「じゃあ、どうするの、やっぱり解説型みたいに、こちらから一方的に話をした方がいいのかな」と、最初はちょっと戸惑いましたね。



常設展示室1「現代の美術」コーナー(キーファー 《シベリアの王女》)

司会：対話型のギャラリートークというのは、**チャレンジ**なんです。解説型だったら簡単で、皆さんに台本を渡して、「これを覚えてやってください」で終わりです。厳しい研修は必要ないんです。でも、美術館としては、来館者の皆さんに、美術の見方、美術を見る面白さを体験してもらるように、それに対応できるトークをしてほしいと思っているのです。現実には、来館者はそこまで思っていないので、研修を受けはじめた頃の皆さんと同じように、**「絵を見る」**ということがどういうことかわからなくて、戸惑われるんだと思います。けれども、苦労しながら少しずつでもやっていくことが大事なので、これからも対話型に取り組んでいきたいと思っています。
神谷副館長：解説型と対話型があって、来館者はどっちが好きか、ボランティアもどっちが得意かということがあるんですね。
司会：美術館にとっても、**ジレンマ**なんです。3期以前は、どちらかという知識を注入していました。4期以降は、知識よりも作品を観察するということを重視したために、知識の注入が少なくなりました。でも、トークをするなかで学んできれば、知識は身についてくと思います。逆に3期以前の皆さんには、対話型のコツを掴んでもらえればと思っています。4期以降と3期以前の皆さんが、うまく交流して、体験や知識をお互いに交換できればというのが、希望なんです。
神谷副館長：何が面白いかと言えば、ガイドを聞きたいと思っている人が、どちらのガイドを欲しがっているかを知って、**いかに対応するか**ですね。
YEYさん：お客様に応じてどうするか、両方をミックスしたりとかですね。
KBMさん：私たちは最初、解説型が基本でスタートしましたが、「これでいいのかなあ、お客様にも話してもらうのはどうだろう」と思いはじめて、実際に「どうですか?」と色々問い掛けをするようになった頃、4期から対話型に変わってきたので、自分の気持ちのなかでは、とてもスムーズに移行できたように思います。でも、いつの場合も相手があったのでですから臨機応変の対応が大切ですね。
司会：ボランティア活動のメインは常設展のギャラリートークですが、長い人で10年、短い人で1

年、これまでに、さまざまな体験をされたと思います。これは良かった、面白かったとか、逆に苦勞したとか、**来館者との感動体験**などがありましたら、お話ください。
KCKさん：感動体験というわけではないんですけれども、サラリーマン風の方で、ステラの作品の前で、「僕、学生時代に、これを組み立てるアルバイトしました」という話を聞きました。
YDYさん：作家や作品にまつわる人に会ったりすると、**ちょっと嬉しい**。
KCKさん：「かなり」なんですけれど(笑)。
OCMさん：初老のご夫婦が見えたときに、この年代の方は、だいたいエコール・ド・パリが好きなんです。とりあえず現代の美術からはじめてエコール・ド・パリ、それからメキシコへと、ガイドをしていたら、「いままで興味もなく、あまりわからなかったけれど、話を聞いてみると、**メキシコ美術は面白い**」と言われて、私もガイドして良かったなあと思いました。人との対話というのは大事だと、つくづく思いましたね。きっと、その方たちはメキシコの絵のことを覚えていて、美術館とともに思い出してくれたら、ありがたいなと思います。
OAKさん：**私の取って置き**はね、いままで一番褒められたのが、脳死学会に行くという学者か医者の方に、メキシコの死生観について話をしたんです。メキシコ絵画のなかに描かれた骸骨を見せながら、骸骨が身近にある、死が身近にあるというメキシコの話をしたら、ゆっくり、しっかり全部聞いてくれて、最後に「いまから京都に行くけれども、あんた一緒に来て話してくれ」と、半分は冗談だけれど、「わしゃ知らなかった。この話、参考にしよう」と言われました。10年くらい前、ちょうど脳死が是か非かで問題になっていた頃でした。
司会：こういう話をもっと聞きたかったのですが、少し話題を変えて、常設展のギャラリートークをするときに、それぞれお気に入りの作品とか、やりやすい作品とか、嫌いだったけれど、だんだん好きになってきた作品とかあると思いますが、こんなコレクションについての話を。
KCKさん：皆さんは、フリーダ・カーロのもうひとつの作品は好きですか。
OCMさん：《オブジェによる自画像》は、美術館でセティングしたものですよね。
神谷副館長：ひとつの箱に入っていたものを、全部見えるようにセティングした。
司会：「自画像」のように見えるように。
KCKさん：私にはちょっと漫画チックで。
OCMさん：ちょうどいいものがいっぱい入っていましたよね。顔のところに置けるものとか。
SBHさん：でも、ああいう風に並べるとするのは、**すごい想像力**ですね。
司会：彼女が「私の分身」として恋人に渡したもので、自画像の画家だから、絶対、自分の姿になると思ったんですよ。
TDNさん：私は、やっぱり《シベリアの王女》ですね。美術館に入って最初に見た作品です。そのときのガイドさんが「どうですか」と言われて、「どこがいいかなあ」と思っていたんです。それから自分でガイドするようになって、とにかく「どこがいいか」を探して、話しているうちに、**だんだん良くなって**。初めての人は、まず、その前に連れて行きます。照明のせいか立体感が出てきて、やっぱりキーファーはいいですね。
YEYさん：私は、クスリングの《マルセル・シャントルの肖像》。最初に見たときはわからなかったんですけれど、ガラス・ケースの外に展示してあって、目の前で見られたときに、手も綺麗で、ピロードの質感とか、髪の毛の感じとか、「すごい」と思ったんですね。女優さんを描いているせいか、**「私を描いて！」**という迫力があって、このとき好きになりましたね。いまはガラス・ケースのなかに入ってしまったので、その質感が見えないんですよ。できることなら、外に出していただいで(笑)、ガイドするときに、「すごいでしょ」と言いたいですね。
KCKさん：とても好きな作品なんですけれど、**減多に出ない作品**は、(前田青邨の)《富貴花》ですね。日本画の綺麗なのは出番が少ないなと思っています。
司会：来年正月の常設企画展「新春日本画名品展」には、綺麗どころの作品はみんな出ますから、楽しみにしてください。
KCKさん：それなら作品の前で、「いいでしょう」って言えますね(笑)。
OCMさん：お客さんも「いいわね」って(笑)。



モディリアーニ 《おさげ髪の少女》

司会：次は子ども向きの教育プログラムや学校などの団体向けのギャラリートークなどのことについて。おとなとは違って、子どもの方が、反応が面白かったりすると思いますので、心に残った子どもたちの言葉があったらお話しください。
OCMさん：まだ「出前アート体験」という名前のなかった頃、ある学校から美術館に依頼があって、学芸員と一緒にボランティアが行くことになったんです。初めてのことだったから、何をするのか話し合いをしました。私はエコール・ド・パリの藤田嗣治が、あの世から甦ってきて、子どもたちの質問に答えるという企画に参加しました。ボランティアの一人が髭と眼鏡を付けて、**教壇に立って**、藤田の声色みたいな感じで話をしました。ずいぶん盛り上がって(笑)。最後は「藤田の作品を見に来てね」と言って帰ったのですけれど、私たち自身がいたく感激をして(笑)、本当に面白かったですね。
YDYさん：私は、学校団体を対応したときに心に残った子がいます。小学校5年生くらいのグループのなかに韓国から転校してきた男の子がいたんです。言葉もそんなにできなくて、先生が付きっきりで。最初に3点の作品を見たんですけれど、話を振っても、ほとんどしゃべってくれなくて。最後に、このなかで好きなものがあったと聞くと、みんなは「これ」と答えてくれたのですけれど、その子は「僕、全部嫌い」って、「でも自由時間があるから、いろいろ見てきてね」と言って解散したんですが、再集合したとき、それまで少し暗い顔をしていた子がニコニコして、**「僕、あれが好き」**と教えてくれたんです。何かわかりますか。
KCKさん：アバカノヴィッチ？
OCMさん：韓国の子なので、李禹煥？
YDYさん：金子潤の《ダンゴ》だったんです。ちょっと心温まる出来事だなと思って、とても印象に残っています。
KCKさん：私は、初めて美術館に来た子に、**「美術館って、面白い」**という感想が残れば、ハ割方、良かったねと思っています。
YDYさん：ひとつでも気に入った作品があればいいのよね。その子が、その日のことを、お父さんやお母さんに、「今日、こんな絵を見てね」って話をしてくれば。



KCKさん：「初めて見たときには何も思わなかったけれど、**いまは好き**」なんて、中学生くらいの子が《シベリアの女王》のこと話してくれたことがありました。私は、また何年か経って、歴史とかも学んだら、また違う考え方をするかもしれないから、「ときどき美術館に見に来てね」って応えました。**OAKさん**：子どもも変わってきていますね。モディリアーニの《おさげ髪の少女》を見て、「何歳くらいの女の子に見える？」と聞くと、10年前の子どもは、だいた10歳から15歳くらいと答えてくれたんですけど、いまはもう必ず20歳代ですね。**OCMさん**：あれが20歳代に見えるの？**OAKさん**：私が思うには、いまはああいう顔の娘が可愛いと思われていて、あの作品は非常にリアルに描かれているでしょ。いまのお母さんはみんな若くて、20歳代で綺麗でしょ。子どもたちには、お母さんの顔のように見えるのよ。**TDNさん**：はじめのころは、常設展が月に1回くらいだと、間隔があき過ぎて、経験を忘れそうなので、学校対応もやらせてもらうことにしたんですけど、おとなよりも子どもの方が、終わった後で、**疲れを感じますね**。子どもたちは思ったことを次々に話してくれるものですから、テンポが速くて、よく動くので、こちらの運動量も多くなって、心地よい疲れですけど。それと最初に掛ける言葉にも気を使って、子どもが何に興味を持っているか考えるようになりました。それから服装も大事ですよ。リベラの《ヘンリー・ノーウェップの肖像》のときに、描いてある男性と同じ三つ揃いのスーツを着てきたんですけど(笑)、残念ながら、子どもたちは気付いてくれませんでした。



リベラ 《ヘンリー・ノーウェップの肖像》

OCMさん：でも、本当に、それは必要ですよ。やっぱり、おとなに対するのと、子どもに対するのとでは違いますから。**OAKさん**：ちょっと話は変わるんですけど、これまでは美術に関する知識は点でしかなかったのね、それがこの美術館に来て、「あれが、あれと結びつく」ということに気付いて嬉しいなと思ったこと、ありませんか。私の場合は、ベン・シャーンの《リディツェ》を見て、「私はここに立ったことがある。行ったことがある」という感じがしたの。大平原のなかで、あの赤い煉瓦を積んだ壁がある小高い丘に連れて行かれて、チェコ語とか、英語とか、5ヶ国語くらいで説明されて、よくわからなかったんですけど、一緒に行った娘に聞くと、ここは焼野原になった場所で保存しているらしいということがあって、あの絵を見た瞬間に、そのとき何もわからなかった光景を、ありありと思い出したの。そうなると、「**あの絵は私のもの**」になるのよね。**KEMさん**：私にはまだ「私の絵」というものはありません。どちらかというと、エコール・ド・パリ派ですが、最近は現代美術を見ることに違和感がなくなってきました。ギャラリートークをするようになって、**現代美術も面白い**ことがわかるようになったところですよ。**SBHさん**：僕は、レッド・グルームスの《ウールワース・ビルディング》とか、ハチャメチャ系の作品が好きなんです。**KCKさん**：あれ、楽しいですもんね。**SBHさん**：見ていて賑やかなものが好きで、《シベリアの女王》とか、モノトーン系の落ち着いた作品が好きと言われると、**おとなだなあ**と思います。**司会**：いつの間にかコレクションの話に舞い戻っていますが、このまま続けましょう。

YDYさん：私は、看板娘の《おさげ髪の少女》を、最初に見たときは、「それほどいいのかな」と思っていたんです。でも、特別展のギャラリートークをやって、いろいろ勉強してから見てみると、「少女が語りかけてくる」気がしてきました(笑)。絵は心を映す鏡というか、気持ちのいいときは気持ちのいいことを、沈んでいるときは沈んだ感じで、だんだん癒し系の作品になってきたんです。最近では、**他人とは思えない**んです。**司会**：とてもいい話ですね。**KBMさん**：私も「おとな」ですから、やはり《シベリアの女王》ですね(笑)。とてもトークしやすいですし。それから荻須高德のパリの作品が好きです。ちょっと困るのが、看板娘の《おさげ髪の少女》。実は私自身その良さがわかるのに時間がかかったので、「大枚叩いて、どこがいいんですか」と、お客様から言われると。**KCKさん**：でも、モディリアーニ展のときに、他のいろんな作品を見て、そのなかで、この娘を見ると、いいですよ(笑)。**YDYさん**：たくさん作品が並んでいるなかで見ると、こんなことは滅多にないので、あらためて「やっぱり、いいな」と。**OAKさん**：モディリアーニ展のお客様もガイドを聞いて、そう感じたんじゃないかな。私を呼び止めて「納得した」って。**KCKさん**：自分の住んでいる街に美術館があって、来ようと思えば、いつも来れて、自分の子どもが学校から訪ねられるって、**すごく幸せ**なことですよ。**司会**：いまモディリアーニ展の話が出ましたが、特別展のギャラリートークのなかで、これまでの面白かった体験とか、記憶に残る展覧会とかについてお話しください。**KCKさん**：やるたびに、これが記録かなというくらい人の少ない展覧会で(笑)。**KBMさん**：あなたは、**通好み**だから。**KCKさん**：いえ、スケジュールの問題で。**OAKさん**：私は多いのばかりだけど(笑)。**神谷副館長**：そういう巡り合わせなんですよ。**KCKさん**：だから、会場のなかは、いつも、**冷房が効きすぎて**いて(笑)。**OCMさん**：私は「冷房が効いていない」と、お客様に言われたことがあります。**TDNさん**：私はこの間、北斎展を初めてやらせていただきました。目安では40分で終わる予定でしたが、1階だけで40分経っちゃったので、お客様に聞いたんです。「まだあと半分残っているんですけど、どうしましょう」って、そしたら「聴いていきます」って(笑)。**KCKさん**：嬉しいですよ(笑)。**TDNさん**：みっちり75分くらいやりましたけれど、ほとんどのお客様が聴いてくれて、**冥利に尽きますね**。終わってから拍手もしてくれて。**OCMさん**：気持ちいいですよ。**OAKさん**：本当に嬉しいよね。**OCMさん**：私もダリ展のときに、最後に手を叩いていただいたんです。会場では静かにしなければいけないので、まずいとは思いながら、心のなかでは、「私も**拍手してもらえた**」と思ったら、すごく嬉しかったです。**KCKさん**：いいですね～(笑)。**OAKさん**：ところで、エルミタージュ美術館展のときに、ギャラリートークの内容がばらばらだったと聞いたんですけど。**KBMさん**：**ユニークな視点**で、ガイドされたように聞いています。例えば色彩にポイントを絞るとか、モチーフに限定するとか。自信がないとなかなかできないことだと思いますね。**KCKさん**：でも、エルミタージュ美術館展は来館者が多かったですよ。**OAKさん**：意外ですが、「エルミタージュ」は知っていても、「モディリアーニ」は知らないという人は多いですよ。**KCKさん**：「荒川修作を解説する」展をやったときに(笑)、初老のご婦人の二人連れが来て、嬉しそ



常設展示室1 入口(グルームス 《ウールワース・ビルディング》)

うに「荒川さん、大好きなんです」と言われて、喜んだら、陶芸家の荒川豊蔵さんの間違いだったんです(笑)。確かに、あのときのちらしは「志野地」みたいな感じだったから。でも、荒川違いも甚だしいですよ(笑)。**SBHさん**：特別展の場合は、作家をよく知っているお客様が来ることがありますよね。**力が入り過ぎ**で、「ちょっと捌ききれないな」というお客様さんに遭遇したときは、どう対応していますか。**KCKさん**：もう聞く側に回っています。**SBHさん**：逆らわないでいいですよ(笑)。**KCKさん**：逆らえないというか(笑)。**SBHさん**：そう言えば、あるボランティアさんが、赤瀬川原平さんに声を掛けたことがあったそうですよ(笑)。**OCMさん**：赤瀬川さんを知らなかったんだ。**KCKさん**：そのとき呼んでほしかった。**YDYさん**：何年くらい前のことですか。**SBHさん**：かれこれ2、3年くらい前かな。**司会**：赤瀬川さんは何回も来ていますよ。**KCKさん**：見たら忘れられない顔なのに。**司会**：河原温さんも来たことがあるんですよ。**YDYさん**：河原さんは誰も顔を知らないから。**司会**：ところで、皆さんは、たまたまボランティアになって集まっているわけですが、活動だけでなく、仲間のことも含めて、**ボランティアになって良かったこと**をお話ください。



オロスコ 《メキシコ風景》

KCKさん：アロエを見ても「マゲイだね」とか(笑)、雲が浮かんでいても「北川民次みたいだね」とか(笑)言っても、そのままで話を通じるところですね。**YDYさん**：「そうだよ(ね)って(笑)。**OAKさん**：楽しんでますねえ。**KCKさん**：そんな感じで、「**は？**」ではなくて、「**ね！**」で話せることが楽しいないつも思っています。**OCMさん**：空を見上げて「藤田の空みたい」と言っていると、みんなも「そうだね」って。**YDYさん**：空とか雲とか、よく見るようになりましたね。空の色とか、雲の色とか。**TDNさん**：私の場合は、女の人と話す機会ができたことです(笑)。**OAKさん**：究極の役得ね。最初に世話人^(註)になったとき、1期の人たちはボランティアをやるのはドキドキの人ばかりで、「一日、**男の人と一緒に**の部屋にいるなんて、私、考えられないから、外してね」(笑)って、お願いされて。**OCMさん**：年配の方ですか。**OAKさん**：意外と、あなたたちくらいの方よ。たまたま主人が博物館のボランティアをやっていたので聞いてみたの。「男の人は、女の人と組むのは、嫌かな」って、そうしたら「根掘り葉掘り訊かれて、いちいち答えるのが嫌だ」って(笑)。そういうこと感じません？　大丈夫ですか。**TDNさん**：**楽しいですよ**(笑)。**KBMさん**：根ほり葉ほりは昔の話。いまは「個人情報」のこともあって、そんなことないですよ。**OAKさん**：**世話人**といえバ、最初から次々に交替で回すというのは、ボランティアのなかにボスのような人を作りたくないということで、はじまったのよね。**OCMさん**：だから任期は半年なんですか。**司会**：「1年に」と提案したこともあるんですけど、皆さんが無理だった(笑)。**KEMさん**：世話人のことが「わかったかな」と思った頃に終わるんですよ。**OCMさん**：世話人を受けると、こんな風に動いているんだってわかる。**KEMさん**：見えないところで、みんなが協力しあってやっているんだなって。**YDYさん**：私も今回初めてなんですけれど、わかっていない部分がいっぱいあったので、やって良かったなと思っています。

OAKさん：世話人をやってみると、苦労がよくわかって、いいなと思います。**TDNさん**：女性と組んで、はじめて気付いたんですけど、「私にはできません」と言う人が、**いざとなったら**、実はすごいんです。**OAKさん**：それ、あるある(笑)。**TDNさん**：とても冷静で(笑)。**OCMさん**：女性は怖いですね(笑)。**KEMさん**：上手な人ほどそう言いますよね。**KCKさん**：「駄目」と言われて、「そうですか」と引き下がったら駄目なんですよ(ね)。**司会**：いよいよ最後の質問です。ボランティアになる前となった後の違いについては、どうでしょうか。**OCMさん**：何か、口調が、きつくなったというか(騒然)。そうじゃなくて、人前でしゃべれるって言うか、初めて会った人でも自分の言いたいことを言えるようになったというか、慣れたというか、まあ、図々しくなったんですね(笑)。**KCKさん**：確かに、知らない人に声を掛けるところからはじまりますからね。**TDNさん**：大体、明るくなっていくよね。**KCKさん**：「**どうして、そんなに楽しそうなの**」って、友だちから言われます(笑)。**KEMさん**：ボランティアになってから、本当に絵が好きな人同士で絵を見に行く楽しさもわかるようになったし、他の美術館に行くときも、ギャラリートークのある日を選んで行くようになりましたね。**KCKさん**：反対に、ギャラリートークを受けたいという気持ちがありますよね。**YDYさん**：やる前は、ボランティアさんと話すことは、あまりなかったけれど。**KEMさん**：最近では、呼び出してでも(笑)。**YEYさん**：私の周りには絵が好きな人が多いので、「半年間の研修がある」と言ったときに、「ただでレクチャーが聞けるんだよね」と羨ましがられました。友だちが来ると、私は作品を見せながら、練習で(笑)、「こうだね、こういうふうだね」なんて。私も楽しんでますけれど、**私の友だちも楽しんで**います。**SBHさん**：去年から仕事が増えて忙しかつたので、すぐには思いつかないのですが、お客様相手ではない女性と話をする機会は増えましたよね。「これが似合うから、どうですか」というセールス・トークじゃないところで、「これが面白いね」という**趣味の世界**の話が。**KEMさん**：絵の好きな人同士のなかに入って、本当に絵について話して分かりあえるのが嬉しいという気持ちですね。**OAKさん**：美術館は日常生活からちょっと離れたところなので、「今日は素敵なおガイドさんの素敵なガイドが聴けたな」と思ってもらえるように、ガイドになって、私は**自分を意識する**ようにしています。お腹が出ないように(笑)。**OCMさん**：確かにそうですね。お客様にいい印象を与える。職業じゃなくてボランティアだから、一般の人なんだけれど、ちょっと**素敵な「おばさん」**だな(笑)と思われると、嬉しいですね。**OAKさん**：「おばさん」でいいのよ。私は「また募集があるから応募して」と勧誘するときもあります。憶えてくれた人には、「**ぜひ仲間に入っ**て」と。**TDNさん**：私もそうです。むさ苦しい爺さんでは、若い娘さんに声を掛けて、引かれると困るからね(笑)。**YDYさん**：**外からも内からも**、しっかり磨かなきゃいけない。**司会**：昨日の「まるごと1日ギャラリートーク」の皆さんの**浴衣姿**は素晴らしかったです。ということで、ここまでの話を聞いて、服部さん、いかがでしたか。**服部総務課長**：10年前にお腹に子どもがいるとき外に出て、10年振りに帰ってきて(笑)、大きくなった子どもの話を、何もしない父親が聞いているような(笑)、本当に楽しい話を聞かせていただきました。**司会**：では、今年の4月からボランティアの担当になった山盛さんは、いかがですか。**山盛学芸主査**：いろいろ話を聞いていて、皆さんが、それぞれ美術館に思い入れがあって、**心の底から好き**でやってらっしゃることがよくわかりました。これからどうぞよろしくお願いします。**司会**：きれいにまとめていただきましたので、これで座談会を終わりにします。皆さん、どうもありがとうございます。(sy)**註**：持ちまわりで担当するボランティア内のまとめ役

展評

2008年6月14日(土)～7月21日(月)
奈良国立博物館

若き日の暑い夏を思い出しながら
国宝 法隆寺金堂展

学芸員という職業柄、仕事関係の展覧会を見に行くと、どうしても美術鑑賞を楽しむよりも、企画している展覧会(実現するかどうかはわからない)のために参考になることを調査・研究する視線で見ることになります。知らず知らずのうちに、初めて見る作品の所蔵先や保存状態を細かくチェックしたり、カタログやパネルの解説文を検討したり、タイトル看板やディスプレイのデザイン、展示構成や導線、照明などを確認したり、最近ではキャプションの文字の大きさなどにも目を配っていることがあります。

こんなことをしていると、どうしても欲求不満になってしまうので、随分前から、純粋に美術鑑賞を楽しむために、専門外の美術(近代以前の日本や世界の絵画よりも彫刻や工芸など)の展覧会に意識的に足を運ぶようになりました。

国宝法隆寺金堂展は、まさに絶好の展覧会で、長蛇の列が出来ているという噂にびくびくしながらも、「若き日の暑い夏を思い出しながら」奈良国立博物館を訪れました。むかし、高校生の頃から夏休みになると、ひとり

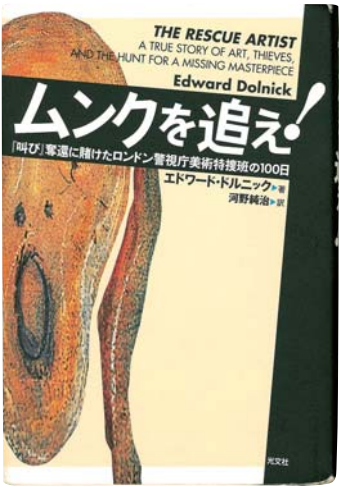
で奈良の遺跡や寺院(仏像)を旅していたのです。とくに「飛鳥」に魅かれるところがあって、石舞台古墳や船橋石(まだ亀形石造物は発見されていなかった)、飛鳥寺や岡寺、橘寺、そして法隆寺などがお気に入りでした。

その法隆寺の薄暗い金堂内陣に安置されていた四天王像が、初めて寺外に持ち出されて展示されているのですから、仕事が忙しくても行くしかありません。平日の朝一番で訪れましたが、会場が広かったせいか、意外にも、ゆったりと鑑賞することができました。四天王像を一体一体、前後左右360度から間近に鑑賞できる久し振りの至福の時間(1時間以上)でした。おそらく当時最先端の技術を駆使して制作され、純和風になる前のエキゾチックな情緒を漂わせた飛鳥仏の最高峰は、現在の日本の美感にも大きな影響を与えているような気がしました。(sy)



法隆寺金堂《四天王像(広目天、増長天、持国天、多聞天)》

盗まれた絵の捜査に、なぜロンドン警視庁が乗り出すのか?と疑問を持たれたあなた。どうぞ本書でその疑問を解いてください。そもそも「美術特捜班」なるものが警察にあるというだけでたいいていの人は驚くと思いますが、著者によれば闇取引される盗難美術品の総額は年間40億から60億ドルにも達するのだそうです。そして、貴重かつ高価な美術品を飾る美術館の警備体制はお話しにならないほどお粗末で、ルーヴル美術館から一枚の絵を盗み出すのは、デパートで万引きするより簡単だと報告されています。うーん、確かに海外の巨大美術館の展示場の一室で、10分以上もたった一人で鑑賞、なんてことも珍しくないですね。鑑賞者としてはこの上ない環境ですが、同業者としては、こんなことで大丈夫か?と不安になることもしばしばです。しかし、他所様の心配をしている場合ではないのかも知れません。間違ってもロンドン警視庁のお世話になって、「…を追え!」(日本版)を出版されるような羽目にはなりたくないものです。(F)



の疑問に答えるために、磯見さんに無理を言って公開制作をお願いしました。展示室のなかに臨時に設えた作業場で、向かって左端の版木から始った作業は、順に2枚目、3枚目と進んで、最後の1枚が刷り上ったのは、サッカーの1ゲームとほぼ同じ90分後でした。その間、200名以上の来館者が初めて見る巨大な木版画の刷りに驚嘆の声を挙げながら見守っていました。(sy)



磯見輝夫氏の公開制作(2008年7月20日)

イベントガイド

■常設展無料開放 10月12日(日)は、「名古屋まつり」に協賛して常設展観覧料が無料になります。ぜひご来館ください。

■10月11日(土)～13日(月・祝)は、「ボランティアフェスタ 名古屋まつりでボラ祭り」!

名古屋市美術館ボランティア活動開始10周年を記念し、楽しいイベントを用意して皆様のご来館をお待ちしています。
《まるごと1日ギャラリートーク》…来場者のご要望に応じて、随時常設展ギャラリートークなどを行います。
《絵の中に遊びに行こう》…モディリアーニの部屋やメキシコのお祭りに遊びに来ませんか?
《アートマップ》…東海地方の身近なアートを紹介します。など
ぜひご来館ください。

■開館20周年記念 20世紀のはじまり
ピカソとクレーの生きた時代展

ヨーロッパ屈指のコレクションといわれるドイツのデュッセルドルフにあるノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館の西洋近代美術コレクションの中から、ピカソとクレーの各時代の代表的名作を中心に、マティス、ブラック、シャガール、マグリット、エルンスト、ベックマンなどの20世紀前半のヨーロッパ美術を代表する作家たちの傑作の数々を紹介します。

会期：10月18日(土)～12月14日(日)
○記念講演会「ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館とそのコレクションについて」
10月18日(土)14時～ 講堂 先着180名 無料
講師：アネッテ・クルツィンスキ氏(ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館学芸員)
○記念講演会《「夜」のモダニズム》
10月31日(金)18時～ 講堂 先着180名 無料
講師：水沢 勉氏(神奈川県立近代美術館企画課長)

○作品解説会
10月26日(日)、11月23日(日・祝) 14時～
講堂 先着180名 無料
講師：笠木日南子(当館学芸員)
○ミュージアムコンサート
11月9日(日)14時～ 地下ロビー 無料
出演：名古屋フィルハーモニー交響楽団メンバー

■常設企画展 河川龍夫：DARK BOX
2008—時間をもった闇

昨年特別展を開催し、好評を博した現代美術家・河川龍夫(1940～)の闇と時間をテーマにした小企画展。「闇を封印」する最新作"DARK BOX 2008"を展示、物質として、あるいは時間としての"闇"をめぐる作品を紹介します。
会期：10月18日(土)～12月14日(日)

■開館20周年記念 モネ《印象 日の出》展
パリのマルモッタン美術館が所蔵するクロード・モネの《印象 日の出》は、第1回印象派展に出品され、「印象派」の名前の由来となった作品として広く知られています。印象派の里程標ともいえるこの作品が近代美術に果たした役割、モネの全画業における位置づけを探るとともに、ルノワール、セザンヌ、ピサロなど、他の作家の作品も併せて展示し、印象派の広がりとしてそれぞれの作家の個性の輝きを紹介します。
会期：12月23日(火・祝)～2月8日(日)
※1月2日・3日は臨時開館します。

○記念講演会「印象派のはじまり」(仮題)
1月12日(月・祝)14時～
講堂 先着180名 無料
講師：高階秀爾氏(大原美術館館長)
○作品解説会
1月24日(土)14時～
講堂 先着180名 無料
講師：深谷克典(当館学芸課長)

■常設企画展 新春日本画名品展
横山大観《日月》など季節を描いた作品を中心に、名古屋市美術館で所蔵している日本画の名品を紹介します。
会期：12月23日(火・祝)～2月8日(日)

■名古屋市美術館20年のあゆみ
開館20周年を締めくくる企画として、名古屋市美術館のあゆみを振り返ります。名古屋市美術館をめぐる思い出やお気に入りの所蔵作品を募集するなど、さまざまな催しにご参加いただき、みなさまと一緒に展覧会を作ります。名古屋市美術館とともにあった20年を思い返していただく機会となることでしょう。
会期：2月21日(土)～3月29日(日)

■コレクション解析学2008—2009
学芸員が当館のコレクションから特定の作品をとりあげ、その魅力などを紹介する講座です。先着180名、無料 講堂
○第4回 11月30日(日)14時～ 講師：原沢 暁子(当館学芸員) 作品：ジュール・パスキン《クララとジュヌヴィエーヴ》1925年 演題：優しい空間の秘密、そしてパスキンという多面体について
○第5回 1月25日(日)14時～ 講師：笠木 日南子(当館学芸員) 作品：草間彌生《ピンク・ボート》1992年 演題：増殖するイメージと解釈—「無限」の可能性
○第6回 3月15日(日)14時～ 講師：伊ッ セー尾形氏(俳優) 演題：美術館で見る、語る、楽しむ

■美術館の「キッズの日」+「おとなの日」
○なりきりアーティスト…「つくって」楽しむプログラムです。
対象：子ども(小学生) 参加費：小学生300円 定員：各回30名
11月22日(土) 10時～12時 締切：10/31(金)
3月1日(日) 10時～12時 締切：1/31(土)
○アート・ウォッチング…「よく見て」楽しむプログラムです。
対象：子ども(小中生)と大人(保護者) 参加費：小中生100円、大人(高大生)300円*、大人(一般)400円*(*常設展観覧料含む。) 定員：各回10組
12月21日(日) 10時～12時 締切：11/30(日)
1月24日(土) 10時～12時 締切：12/31(水)
申込方法など詳しくは当館ホームページをご覧ください。

■開館20周年記念フライデーナイトシアター
「ドキュメンタリー特集—この20年間で活躍したアーティストたち—」この20年間に活躍したアーティストたちに関するビデオを上映します。様々なジャンルで活躍するアーティストたちの様子を知ることができると同時に、ドキュメンタリー作品としての魅力も味わうことができます。金曜日の夜は、美術館で楽しいひとときをお過ごしください。
開催日 2月27日、3月6日、3月13日、3月27日
18時～ 講堂(定員180名、入場無料)
※詳しくは当館ホームページをご覧ください。(T.Y)

イベントレビュー

巨大な木版画を刷る！

「版」の誘惑展の関連事業として、現代日本を代表する木版画家・磯見輝夫さんの公開制作を行いました。

木版画というと、一般的には手にとって見るほどの小さなものを思い浮かべますが、磯見さんの最大級の作品は、量2.5枚ほどの大きさ(169.0×236.0cm)です。今回は、この巨大な木版画の「版木」も一緒に展示しています。普通なら板塀を作るための材料となる杉材(長さ170cm、幅23.5cm、厚さ1.8cm、重さ約2g)を全部で10枚使っています。

展示された版木を見て、その物質的な存在感とともに、意外に浅い彫り跡の版木を使って、どのように刷られるかと思われる来館者

【編集後記】

猛暑とともに沸いたスポーツの祭典北京オリンピックも終わり、名古屋にも少し秋の匂いが感じられるようになってきました。「芸術の秋」ということで、各地の美術館などでは、展覧会はじめ様々な美術に関するイベントが予定されています。名古屋市美術館の20周年記念企画も、秋から冬にかけて目白押しです。春号に続き今号も、20周年企画ということで、いつも美術館の活動を支援してくれているボランティアの活動にスポットをあてた特別号です。ボランティアの活動が始まって10周年、この10年間に活動内容もかなり発展してきました。時代の変化とともに、地域における美術館の役割が少しずつ変わり、美術館と地域社会を繋ぐボランティアの存在はますます重要になってきています。今後も、ボランティアとともに、名古屋市美術館へのみなさまの温かいご支援をよろしくお願いいたします。(hina)

アートペーパー第79号 発行日：2008年10月1日

発行 名古屋市美術館 [白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は翌日)



Nagoya City Art Museum